

□誰でも貧困になる時代

「貧困は特殊な人がなると思われてきましたが、今は、医療や介護で、簡単に貧困になるんですよ。」と、講演は厳しい話で始まりました。

NPO法人ほっとプラスで受けている相談は、年間500件余り、「自分がそうなると思っていなかった」という方がほとんどなのだそうです。

「昔はもっと貧しかった」という方もいますが、現代の貧困は見えづらいことが特徴です。

下流老人の特徴は、①収入が少ない②貯蓄がない③頼れる人がいないこと。

高齢になって孤立すると、情報が無い、頼る人がいない、健康不安、さらに認知症に気づくのが遅れてしまうという状態になります。

男性より平均寿命が長く年金が少ない女性は、貧困になる確率が高くなります。高齢者の貯蓄は、4割が500万円未満、全くない人も16・8%、「300万円」の貯蓄は、約4年で底をついてしまいますよ」と聞き、参加者の大半を占める私たち女性は、年金や貯蓄のことが心配になってきました。

国民年金には、遺族年金の仕組みがないのもあまり知られていません。

□生活が不安で働き続ける「過労老人」

誰も自分が何歳まで生きるのかわかりません。スウェーデンなどの福祉国家とは違い、日本は、働けなくなったときに安心して暮らせる設計にな

っていないので、高齢者の多くは生活が不安で働いています。

しかし、高齢になれば、不安定な非正規雇用が多いのが実情です。ましてや、医療や介護の費用が予想よりかかります。生活保護の51%が高齢者という話には軽い衝撃を覚えました。

事故を起こしたり労働災害にあう高齢労働者が近年多くなっていると思いませんか？

わずか数年の間に、下流老人から過労老人に問題は広がっていることがわかります。

藤田孝典さん講演会

あなたが下流老人になる日

今、私たちにできることは何か？

年金や貯蓄が少ないうえに、病気や事故、熟年離婚など、やむを得ぬ事情により貧困生活を強いられる高齢者（及びその恐れがある高齢者）を下流老人と言います。

ほっとプラスでは、

相談に見えられた方の8割を生活保護に結び付けています。

「普通の生活を送るのに足りない分を補ってくれる制度」「家が売れるとは限らない、だから持ち家でも受給できる」との言葉から本当に困ったら頼れる制度だと伝わってきました。

□幸せな老後を送るためにできること

生活を楽しみ、ないものを補う知識や技術があれば、日常は工夫次第でどのようにも豊かになります。なにより、家族や友人などの人間関係に恵まれていれば孤立することはありません。

地域の中でも、どこでも意識してつながりをつくるのは今からでもできる、と皆さん共感。

生活をダウンサイジングして、周りとの助け合いながら暮らしていければ幸せな老後を送れるでしょう。

□安心して暮らせる社会保障へ

子どもを育て、親の面倒を見る世代、30〜49歳がワーキングプアでゆとりがなくなっています。

本来、年金制度は若者から親に仕送りをしながら済むように、若者を助けるための仕組みだと藤田さんは言います。

また、近著では、支出で大きい住宅や教育、医療、介護など負担を軽減する政策が重要な貧困対策だと言及しています。

誰もが普通の暮らしができる、貧困のない社会を実現するためには、税負担を重くして福祉予算を手厚くする政策「高福祉高負担」が問題解決の大きなポイントであると思いました。



藤田孝典さん

社会福祉士。聖学院大学客員准教授。
NPO法人ほっとプラス代表理事。
著書『貧困クライシス』『下流老人』『続・下流老人』『貧困世代』など。

2017年 6月21日(水)10:00~12:00

生活クラブ生協 狭山生活館

■主催: 狭山ブロック運動協議会
生活クラブ・ワーカーズコレクティブ・
市民ネットワーク